

教育研究業績書		
令和 7年 5月 1日		
氏名 池上 奈摘		
研究分野	研究内容のキーワード	
子ども学および保育学関連	保育内容, 遊び, 協同性, 社会性, 人間関係	
教育上の能力に関する事項		
事 項	年 月 日	概 要
1. 教育方法の実践例		この欄記載事項なし
2. 作成した教科書、教材	2025年4月1日	「イラスト 乳児保育」発行: 株式会社東京教学社
3. 教育上の能力に関する大学等の評価		この欄記載事項なし
4. 実務の経験を有する者についての特記事項	2022年7月3日-2023年3月31日 2022年9月10日・2022年9月17日 2023年7月2日-2024年3月31日 2023年9月9日・2023年9月16日 2024年6月23日・2024年8月11日	保育士試験実技試験採点委員 佐賀県保育士等キャリアアップ研修 乳児保育の指導計画、記録及び評価 保育士試験実技試験採点委員 佐賀県保育士等キャリアアップ研修 乳児保育の指導計画、記録及び評価
5. その他		この欄記載事項なし
職務上の実績に関する事項		
事 項	年 月 日	概 要
1. 資格、免許	2012年3月9日 2012年3月31日 2014年3月14日 2021年3月18日	幼稚園教諭一種免許状 取得 保育士資格 取得 幼稚園教諭一種免許状 取得 幼稚園教諭専修免許状 取得
2. 特許等		この欄記載事項なし
3. 実務の経験を有する者に	2014年4月1日-2020年3月31日	6年間の保育園での保育経験

ついでの特記事項	2020年4月1日- 2022年3月31日	2年間の幼稚園での保育経験
4. その他		この欄記載事項なし

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) イラスト乳児保育	共著	2025年4月	東京教学社	本書は、保育者を目指す方を対象に、イラストや写真、動画を多く使用し、分かりやすい構成となっている。また、事例をつかって、よりリアルな保育現場を想像しながら学べるよう、現職者の声も多く記載しており、学生のみでなく保育者にも、リカレントの教材として活用できる内容である。
(学術論文) 5歳児同士のほめる経験とほめられる経験の実態(査読付)	共著	2021年3月	中村学園大学発達支援センター研究紀要第12号 P. 55-58	本研究では、子ども同士のほめる行為やほめられる行為の体験頻度とその内実について調査した結果、大人とのコミュニケーションの中で自分自身がほめられたり、他者をほめたりすることを聞いたりすることで、ほめるという行為の理解を深め、実行するレディネスになっている可能性が高いと示唆された。[池上奈摘・野上俊一、共同研究につき担当部分抽出不可能]
幼児の連合遊びにおける協同性のあらわれ(査読付)	単著	2022年2月	中村学園大学大学院修士論文	5歳児の自由遊び場面で観察された連合遊びと協同遊びにおける幼児間の相互作用に焦点を当て、遊びを協同的に進めていくための前提となる「同じ遊びをしている仲間である」という意識や感覚(協同的感覚)がどのような形式を伴って表れるかを検討した結果、連合遊びの中で同じ玩具や空間といった物理的類似性や近接性が同じ遊びをしている仲間という心的枠組みを生じさせることで、協同遊びに展開する可能性が高くなると推測された。
幼児同士のほめる経験とほめられる経験の実態ー保育内容「言葉」から保育者の言葉と関わりについてー(査読付)	単著	2023年3月	佐賀女子短期大学研究紀要第57集第2号	本研究では、幼児のほめる経験ほめられる経験と発達について検討するため、経験頻度とその内実について調査した。その結果、年齢が上がると同時に他者との関わりが増え、関係性が深まることにより多くほめる経験していることが考えられた。また、子どもは大人のほめの言葉や用いる場面をモデルとし、友達同士でのやりとりに影響を与えることが示唆された。
保育現場とつくる協働体制(1)～学生から保育現場に向けた実習事後アンケート報告から～	共著	2023年3年	佐賀女子短期大学研究紀要第57集第2号	【当該業績全体の概要】 本研究では、保育者養成校と現場、学生との連携の場や方法を模索し、実習後のアンケートを学生から現場へ発表する形式を実施した。その結果と学生と現場からの感想の報告を行い、効果的な協働体制の構築に向けた課題を示した。 【本人執筆部分の概要】 保育所実習後の発表を終えた学生と現場の感想について執筆した。 著者：相浦雅子、池上奈摘、大江登美子、松本勇治
「不適切保育」に関する学生の意識調査～静岡県裾野市の事件を基に～	共著	2023年8月	佐賀女子短期大学 研究紀要第58集第1号	昨今、保育現場における「不適切保育」の問題が後を絶たない。子どもの命を守ること、人としての尊厳を守ることが保育士の職務である。それにも関わらず、専門職であるはずの保育士がこの重大な職務を遂行できない。この実態を踏まえ、保育士養成校の学生の意識調査を行ない、「不適切保育」をどのように捉えているのか、また、学生として考えられる要因と手立てについてまとめた。 [池上奈摘・相浦雅子、共同研究につき担当部分抽出不可能]
保育現場とつくる協働体制(2)～学生から保育現場に向けた実習事後アンケートの報告から～	共著	2024年3月	佐賀女子短期大学 研究紀要 第58集 第2号	保育士養成において特に「実習指導」は、連携や協働が必要であり、保育現場との協働が必要不可欠である。本学で昨年度から取り組んでいる『保育所実習を終えて～学生たちからの情報伝達～』では、昨年度と比べ県外の保育施設や養成校も参加し2倍を超える参加者数だった。学生の発表した感想の報告と参加した保育現場や養成校の感想の報告をまとめ、協働体制に向けた課題について考察した。 [池上奈摘・松本勇治、共同研究につき担当部分抽出不可能]
(その他) 5歳児同士のほめる経験とほめられる経験	—	2019年3月	日本発達心理学会第30回大会、早稲田大学 戸山キャンパス	本研究では幼児が他者への積極的な関与方法である「ほめ」をどのように認識し、行動しているか検討するために5歳児のほめる経験とほめられる経験の有無と内容について、叱る経験と叱られる経験および大人から受ける経験と対比しながら検討した結果、幼児間でほめたりほめられたりする経験があり、大人からほめられた経験は、ほめる行動様式の獲得につながり、友達をほめる経験が促進されることが示唆された。[池上奈摘、野上俊一]

2歳児の遊びの始まりと維持に関する事例的考察	—	2020年3月	日本発達心理学会第31回大会、大阪国際会議場（オンライン開催）	本研究は、遊びの始まりだけでなく遊びの維持と終結に関する2歳児のやり取りについて、遊びが成立した事例と失敗した事例を対比し検討した結果、遊びが長く続く場合は、遊びに誘った子が主導権を持ち、指示を出す事で遊びが広がり、遊びが続くことが観察され、遊びの成立に失敗する場面では、遊びに誘う明示的な関り方をしても、誘う相手が他の遊びをしているなど、声をかけるタイミングがずれていることが多かった。[池上奈摘、野上俊一]
老化と死についての幼児の理解	—	2020年11月	九州心理学会第81回大会、鹿児島大学（オンライン開催）	本研究では、幼児が持つ老化と死に関する理解と発達について検討するために、幼児を対象に、老年期は青年期に比べて身体的属性や心的属性が低下するのか向上するのかとその理由を回答させた。その結果、老人期になると様々な身体機能は向上よりも低下を有意に多く回答したが、心的属性については有意な差は示されなかった。[池上奈摘、野上俊一]
幼児同士のほめる経験とほめられる経験の発達的变化	—	2021年3月	日本発達心理学会第32回大会、関西学院大学（オンライン開催）	本研究では、幼児のほめる経験ほめられる経験と発達について検討するために、3、4、5歳児を対象に幼児同士および大人とのほめる経験ほめられる経験、叱る経験叱られた経験の有無とその内容を尋ねた。その結果、大人からほめられる経験者数と友達をほめる経験者数の間に連関があった。[池上奈摘、野上俊一]
同じ遊びをしている5歳児の協同的感覚	—	2021年5月	日本保育学会第74回大会、（オンライン開催）	本研究では、自由遊びにおける5歳児の集団遊びを観察し、連合遊びにおいて協同的関わりが示されるのか否か、どのように現れるのかを検討した結果、組織化されていない連合遊びにおいても、遊びの空間を共有している相手を仲間と認識し、仲間の役に立とうとするといった協同的な感覚に基づく関わりが存在することを示唆された。[池上奈摘、野上俊一]
他児のパフォーマンスに対する5歳児の関わり方	—	2021年11月	九州心理学会第82回大会、琉球大学（オンライン開催）	本研究は、幼児が他児のパフォーマンスに対して他児のパフォーマンス変化を期待して関わるのか否かを検討するために5歳児を対象に友人が鉄棒の逆上がりをする場面に対してどのような声掛けを行うのかとその理由を尋ねた。その結果、行動を強めるという目的でほめ行為を意識的に行っておらず、励ましや結果の承認に分類される関わり方をしていた。[池上奈摘、野上俊一]
5歳児の集団遊びにおける自己状況の表出	—	2022年5月	日本保育学会第75回大会（オンライン開催）	本研究は、自由遊びにおける5歳児の集団遊びを観察し、大人と同様に子ども同士でも自己状況を表出したり、評価的な反応をしたりするのかを検討した。その結果、幼児同士では自己状況は表出するが、それに対して評価的な反応はせず、「見て」といった自己状況の表出に対して、目線や相槌といった反応を行う。この反応によって場や遊びを共有する仲間であることを認識しようとしていると示唆された。[池上奈摘、野上俊一]